

音声自動翻訳機を使用したボディケアの実践報告 ～東京マラソン 2019 の例～

小野寺 恒己

東町整骨院

Practical report of body care using automatic speech translator

-Example of Tokyo Marathon 2019-

Tsunemi Onodera

Higashimachi Judo-Teraphy Clinic

Key words : Automatic voice translator (音声自動翻訳機) , body care (ボディケア)

【背景】

我が国は、平成 18 年に観光立国推進基本法を制定し、魅力ある観光地づくりと国際・国内観光の振興を推進し、観光立国の実現を目指している。スポーツツーリズム（スポーツと観光の融合）は有効な観光資源のひとつである。その代表として東京マラソンがある。マラソン経験の有無に関わらず抽選で当選すれば参加可能な都市型マラソンであり、年々参加申込者数が増え続け、海外からの参加者も増えている。

著者はアスレチックトレーナーで組織する某 NPO 法人（以下：「某 NPO 法人」）の会員として東京マラソン 2018 における「ボディケア」のボランティアスタッフとして参加し、海外からの参加者のケアを担当した。英語圏以外のランナーにも対応した際に、口頭および、予め用意した「日本語・中国語・英語を併記したペーパー」（文字）によるコミュニケーションができず、「身振り・手振り」により行った。著者以外でも同様の対応が見られた。

そこで、「ボディケア」を実施するにあたり、ランナーをケアする上で必要な問診・リスクファクターの把握・徒手検査等、さらにランナーとの信頼関係構築の方法としての「会話」は重要であり（写真 1）、専門の

通訳者不在のためその方法を模索する必要があった。

東京マラソン 2019 では、近年普及している音声自動翻訳機を使用する機会があり、その有用性と問題点を検討する機会を得たので報告する。

【方法】

対象者は東京マラソン 2019 参加ランナーのうち、某 NPO 法人が提供するボディケアを利用し、日本語の会話ができない利用者を対象とし、その唯一該当したのは、ベラルーシからの旅行者（24 歳、男性、完走者）で、日常はロシア語を使用し、かつ英会話が可能であった。

使用機器は、ソースネクスト社製音声自動翻訳機「ポケトーク」（以下「翻訳機」）であり、音声入力後に文字と音声で翻訳されるため「視覚及び聴覚」で理解できる機能がある。

翻訳機の設定は「日本語とロシア語」を設定し、「ケアの待ち時間・ケア中・ケア終了後」までを翻訳機を使用して会話した（写真 1、2、3）。

有用性の評価は著者およびランナーにより 5 段階評価を行ない、その他気づいたことを明らかにした。

【結果と考察】

翻訳機の精度としての有用性は両者ともに最高の評価であったが、本件の使用状況は、受付からボディケア終了後の全体を通しての評価であり、以下の問題点が明らかになった。

(1) 日常会話での問題

日本語での日常会話は、口語調において文法が多少おかしくなっても日本人同士ではほぼ意味が通用するが、翻訳機においては文法を考えて音声を入力しないと、真意と異なった翻訳になった。

(2) 口癖および滑舌の問題

会話の中で口癖がある場合、意味のない言語を発す

場合がある。著者は、話始めによく「はい」と言う癖がある。「はい、痛みはありますか」が翻訳機では、「肺痛みありますか」に翻訳された（写真4）。

しかし、翻訳機は発した言語が文字で表示されることから間違いに気づくことが容易で、発言を即座に訂正することができた。

(3) ボディケア実施に要する時間の問題

本件のようなスポーツ現場におけるボディケアの場面において柔道整復師でもあるアスレチックトレーナーは、問診・検査とケアを同時進行することがあり、翻訳機は音声入力時にボタンを押さなければならないため両手が使えなくなる。そのため翻訳機への音声入力時間と翻訳までの時間が加わるため1人あたりのボディケアに要する時間が長くなった。

著者の様子を見ていた他のアスレチックトレーナーも「翻訳機操作の人員」がいないとケアに時間を要すると指摘していた。

【おわりに】

柔道整復師向けの英会話や医学英語の書籍が出版されているが他言語には対応できない。特に救護等外傷への対応では、インフォームドコンセントを行わずして医学的処置はあり得ないと考えられ「身振り・手振り」、「雰囲気」では正確な「見立て」や「施術の同意」が不可能であるため、言語によるコミュニケーションは重要である。

音声自動翻訳機を使用したコミュニケーションとボディケアの1例について検討した結果、リスクファクターの抽出やランナーの要望を聞き、ケアの説明、ケアへの同意、世間話による「おもてなし」をする上でコミュニケーションが可能であったことから音声自動翻訳機が有用であることが示唆された。使用頻度が増えると術者も慣れ、医療現場、スポーツ現場で十分通用すると考えられた。

翻訳機の供給量が増えると価格も抑えられ、医療現場、スポーツ現場に普及されると考えられる。

（受理 2020年9月3日）



写真1 はじめの挨拶



写真2 身分の説明



写真3 翻訳機使用理由の説明

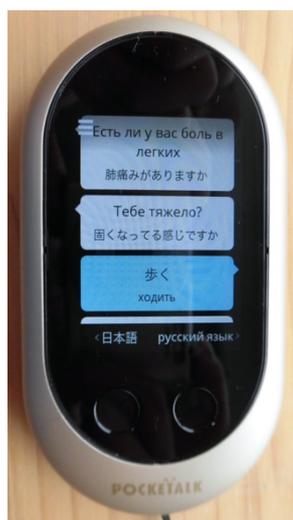


写真4 口癖が誤訳された

※ 話し手の言語側に「吹き出し」で文字が表示される